

は し が き

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

一代諸教の信よりも

弘願の信楽なほかたし

難中至難とときたまひ

無過斯難とのべたまふ

と仰せられてあるが、この一首の御和讃も表から見ると裏から見る時は大変な相違がある。表から見ると時は値ひ難い、得難い他力の信仰を、唯で獲さして戴いたとはどうした仕合者であろうかと、難を向うに眺めて、自分はやすく獲さして戴いたと自惚れて居るのである。しかし裏から眺める時は、聞えたように聞えて居ないのが他力の信仰で、深く切込めば切込む程窟は判るが疑の曇りは去らず、進みも退きも止まることも出来ず、「真実の淨信は億劫にも獲難し」を実地に味うのである。

真宗の他力ほど難しい信仰はなく、聞き得た後はこれほど易い信仰はない。しかし

多くの道俗は眞の難さを知らないから眞の易さを知らない。

言葉の上の他力や、その儘のお助けや、ただは誰でも言い得るが、他力不思議に生かされ、十方法界に動く散乱放逸の心が無条件で赦された絶対の境地、只と言う言葉までいらなかつた只の世界に苦抜して出る事が至難である。

それは難かしよう聞くから難かしいのであると仰せらるるかも知れないが、私のような地獄這出の機は、不思議の仏智を「はい」と素直に聞くような柄でなかつたのである。

それは機を見るからである叱られるかも知れないが、私のようなねぢけ者は、見るなど言われるれば却つて見ずには居られない疑い深い奴である。

それは法の聞き方が足りないと言わるるかも知れないが、何にも知らずに居る時には疑いは出るものではないが、参れそうにない機の出て来たのは、聞き方が足りたがら出て来たので、その先の開発の妙味まで導き得ないのは、聞き方が足りないと

知識ちしきの聞き方かたが足りないのではあるまいか。

それは親様おやさまに任せないから難むづかしいのだと言いはるるかも知れないが、私わたしは眞まことの親様おやさまを知らなかつたから探さがし求めたのだ、任せ心こころが判わからないから泣ないたのだ、色いろにも見えみない声こゑにも聞きえない心こころのみ親おやに此世このよで逢あいたかつたから探さがし求めたのである。

それは素直すなおに聞きかないから手間てまが掛かると仰おつしやるかも知れないが、この機きを素直すなおに聞きく者ものと思おもうて感情かんじように誤魔化ごまかされて居いるのが、橋慢きやうまんの親玉おやだまではあるまいか。八千遍べんの御苦勞ごくろう、三世ぜの諸仏しよぶつに証明しょうめいさし、十劫じゆう已來いらい立たし通として置おいたほどの洩太しよとい機きではな
いか。

それは法ほうのお手元てもとに眼めを付つけないから早はやく夜よが明あけないのだと申もうさるるかも知れないが、私わたしは夜よが明あけた味あじを機きに尋たずねて見みれば、明あけたのか暮くれたのか水際みずぎわを知らな
だから驚おどろいて求もとめだしたのである。

それは親様おやさまが御承知ごしやうちであると言いわゆるるかも知れないが、明み信しん仏智ぶつちの上うへからは、私わたしの

機を暗らして呉れなければ信心獲得とは言えないと、真剣に切り込んだのである。

これから先が私の火花を散らして求めさせられた所で、理窟は判つて居ながら心の奥底が承知しなくて悩んだのである（『入信の道程』に詳し）。

法は御手元は十劫已来御成就で疑う余地は無いけれども、私の心を私が疑うて居るのだから仕方が無い。大空には障害物は無いけれども、地上に雑多の難関が有る様に助くる法は誓願不思議で易往であるけれども、助かる機に雑修の溝も自力の小石も有るのだから無人である。

この機は親が承知と言う事も、見抜いた上の名号成就と言う事も知つて居ながら、「はい」と素直に受け切らない所に道を求むる者の苦しさが有る。

しかしその苦しさを突破した後でなければ真の楽しさはない。晴れ切らない心に泣かされた人でなければ、晴れた後の尊さは味えない。求むる態度が真剣でないから開発の境地まで進み切れないのだ。

岸上がんじょうに腰こしを下おろして、生死しやうじの苦海くかいを死後しごに眺めつつ往生おうじやうさされる事を待つ人と、私わたしのようただいまなく今いま苦海くかいに沈淪ちんりんして渦巻うずまきの中に居り、一息ひといき一息ひといきが毒焰どくえんを噴ふきつつ、火車ひのくるまに運はこばれて行く姿すがたであると驚おどろいた人間にんげんとの求道きうどうの仕方しかたは違ちがわなければならぬ。また苦く抜ぬした後の慶よろこびも天地てんちの相違さういが有かるのは勿論もちろんである。

嗚呼ああ法ほう華りゆう程ほどの仕合しあわせ者は天てんにも地ちにも只一人ただひとりである。求めずには居いられなかつた、進すすまずには居いられなかつた、疑うたがうまいとすれば益ます益ます疑うたがわずには居いられなかつた。飢渴きかつにくるしむ時ときには御飯ごはんの講釈こうしゃくや水みずの分析ぶんせきは腹はらが立たつやうに、墮おちる者ものをお助たすけ、死しにさえずれば往生おうじやうと、死しんだ先さきの業わざみよりも現げん在ざいの苦くしさを披ぬいて欲ほしかつた。

死し後ご五十二段ごじふにだんを超ちやう証しやうす親おやなら、何故なぜ此世このよで無明むみやうの闇やみを晴はらしてくださらないかとすねて出でた。八千遍へんの御苦勞ごくろうと言いながら、私一人わたしひとりはこんなくるしに居いるのに、濟さい度どが出来できないではないかと誘そしつて出でた。三世ぜの諸しよ仏ぶつが総掛そうがりしながら、法ほう竜りゆう一人ひとりの火ひの車くるまを止とめ切きらないではないかと悪口あくこう言いつて出でた。絶ぜつ対たい他力たうりきの真宗しんしゆうを聖人しやうにん様さまは弘ひろめな

がら、私に是程の苦勞を掛けて、何処に他力があるかと泣きついたけれども、それから先を教えて呉れる知識は居ない。御経やお聖教は眺めて居るけれども、私の底の知れない猛火を消す事が出来ない。上の心は騒ぐけれども下の心はびくともしない。何故この心が驚いて呉れないか、聞いて呉れないか。

この痺れ切つた逆謗の屍の心が「うん」と聞き得て呉れなければ、此儘無間のどん底え喰り込むではないかとせき込み、今臨終！息が切れたらどうなるかと、切込んだ時、今まで聞いたのも、覚えたのも、知つたのも、読んだのも、悉く間に逢わない。この苦しい胸を抱えたまま……までは口に出せるけれども、その先の望みの綱が切れ果てた一刹那と、只ぞ一の一言が貫いたのと、一切の無明の闇の晴たのと、親様！と声を発したのは同時であつて、これはこれ不可称不可説不可思議の信樂である。悪魔の法竜の無量永劫の苦の根を抜かれた嬉しさじやもの、踊躍歡喜、信心歡喜と踊り上らずに居れるものか。唯除逆謗と捨てられた法竜が廻心皆往と生かされた

のだもの、判るとか判らんとか文句が言えるか、判らん者には判らんのだ。こうまで攻め上げなければ自力の機執は捨たらないのか。八千辺の御苦勞も、三世の諸仏の証誠も、よせかけよせかけの念力も法竜一人を生かすためであつたのか。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。往生や正覚、正覚や往生、法竜が生きたぞ、親が生きたぞ。信樂開發の一念とはこの事か、信ずる世話まで親がして呉れたのか。信じ切らない法竜じやと、親が信じ切つて呉れた事を信じさされたとは「あら心得易の安心や」、易いと言う言葉までもいらぬ易さであつたなあ。

疑い深い法竜が、法を見てよし機を見てよし、疑う余地の無くなつた事が尊いのである。判らん儘のお助けと思つて居た法竜が、判らん奴じやと判つた不思議の境地が惠まれたのである。

今までは死後の往生とばかり考へて居た法竜が、現在の一刹那に「信受本願前念命終、即得往生後念即生」と、心の往生をさされ住不退転と生かされた事が慶ばしいの

である。

今まで、信前信後の水際みずぎわの判わからなかつた法竜ほうりゆうが、鮮あまやかも鮮あまやか、弥陀みだの利剣りけんで無明むみやうの闇やみの切り墮おとされた一刹せつな、仏智ぶつち満入まんにゆうし、十方ほうほう法界かいわ我物がものとなつた大決定心だいかつじやうしん、同時どうじに見ゆみる真仮しんげの水際みずぎわ、こうも不思議ふしぎの信念しんねんかと踊り上あがらずには居いられない。

法徳ほうとくから言いえば、これはこれ正しやうじやうじゆ定聚だいていの大菩薩だいぼさつ、機相きさうから言いえば、これはこれ下根げこん下劣げれつの悪衆あくしゆじゆう生せい、絶対ぜつたいの悪あくが絶対ぜつたいの法ほうに生せいかされた嬉うれしさ、歡喜くわんぎの言葉ことばも南無阿弥陀なむあみだ仏ぶつ、懺悔ざんげの言葉ことばも南無阿弥陀なむあみだ仏ぶつ。

救すくわれた法竜ほうりゆうの嬉うれしさを記しるして『歡喜くわんぎの泉いずみ』とし、毎年まいねん二回にかい出版しゆつぱんして道みちを求もとめられる方かたの助縁じゆえんとしたいと念ねんじて居おります。